

## 市民によるオンブズマン活動を育てる — オンブズマン養成基礎研修講座開催される —

福祉サービス利用者の権利擁護を推進するためには、様々な制度や実践が重層的に組織化されるとともに、利用者の声を聴き、最善の利益を保証するものでなければなりません。その一翼を担うのが、市民によるオンブズマン活動です。

その市民オンブズマンを育成していくと、「NPO法人湘南ふくしネットワークオンブズマン」の主催による「オンブズマン養成基礎研修講座」が、七月六日〜八日の三日間、横浜市港南区の「ウイリング横浜」で開催されました。

この研修会には、オンブズマン活動に関心を持つ市民だけでなく、県内外の社協や施設職員など多くの参加がありました。

参加者は、オンブズマンの役割だけでなく、権利擁護に関する考え方や成年後見制度、地域福祉権利擁護事業の制度等のほか、障害を理解するための基礎知識を学びました。

「関係者の声から学ぶ」と題した研修では、利用者・家族の代表者から「オンブズマンには市民・第三者・専門家としての眼を持ちながら、本人の代弁者としての役割を担って欲しい」という期待の

声があり、また施設職員からは「利用者にとってより良いサービスを創りだすためにオンブズマンを施設に導入することの大切さ」についてお話がありました。



ビデオを使ってオンブズマンの役割を分かりやすく説明する東洋大学社会学部の高山直樹助教授

は、疲れも見せずに熱心に講義を聞き、また講師や参加者と交流を図っていました。今後のオンブズマン活動の広がりを見守っています。

◆NPO法人湘南ふくしネットワークオンブズマン  
☎0466-81-9218

## 読者の声

— 「癒し」のあるサービスを —

近頃、各地で医療関係者と患者との間で、心の痛む気の毒な事件が相次いで起きています。

最近、身内の者が病院に入院し、三回に渡る腰の手術を受けました。八十三歳になる彼女の戸惑いは、病院という環境の変化や時間の流れについていられないことでした。食事の不平は、好物を差し入れることで大分解消されましたが、三人の担当医師の意見がそれぞれ食い違い、彼女はとても混乱して、最後は意地の張り合いのようになりました。

それを称して「ボタンの掛け違い」と言っていました。医師方と四十歳の年齢差がある訳ですから、そこは押して知るべしです。

「寝てばかりいると先生に叱られる」と言って、一日十五時間近くボツンと車いすに座り続け、見舞いに行く度に「私ボケてないよネ」とか「どうして…なの？」の疑問に、ゆっくりと周囲から廻り込むように説明すると、「あゝそう

なんだ」とやっと納得します。

医療現場の大変さも良く理解できます。でもそんな姿を見ていると、高度な技術（治療）ばかりではなく、福祉や医療を提供する方々が優しく相手に配慮したり、和やかな気持ちにさせたりできる「癒し」の心を持つことも大切なことだと感じるのです。六十五歳以上の、いわゆる「高齢者」の人口が二千三百万人を数えるこれからの社会、現役世代と高齢者世代との接点をつなぐ、福祉・医療サービスのあり方がますます問われるのではないのでしょうか。

病院や福祉施設、グループホーム、在宅介護事業者など、地域の中に様々な資源が生まれてきています。そのどれもが、人間いよいよとなった時、安心して身を寄せられ、心を癒される温かなサービスであって欲しいと願います。  
(タカ)

### ▶投稿をお寄せください◀

「福祉について思うこと」をテーマにした投稿をお待ちしています。他のテーマや本紙内容へのご意見ご感想でも結構です。分量は700字程度。匿名でも結構です。



郵送：〒221-0844  
横浜市神奈川区沢渡4-2  
FAX：045-312-6302  
Mail：kikaku@jinsyakyo.or.jp  
いずれも「県社協企画課タイムズ係」と明記のこと